

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02197

研究課題名（和文）徳川儒学における儒礼受容とその展開：林家・昌平坂学問所の思想と実践を中心に

研究課題名（英文）Adaptation of Confucian ritual practice in the late Tokugawa Japan: Thought and behavior of Rinke and the Shoheizaka Confucian scholars

研究代表者

眞壁 仁 (MAKABE, JIN)

北海道大学・法学研究科・教授

研究者番号：30311898

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、寛政期以降の海外学術蒐集の中心であった江戸林家の家塾や昌平坂学問所の儒者を取り上げて、彼らの儒礼における父祖に対する家祭と孔子崇拝の積奠をめぐる思想と実践を関連づけて分析した。その際、古代日本の「古礼」と中国宋代の「程朱学」における儀礼への回帰にとどまらない要素に着目し、それらが必ずしも明代・清代学術受容に起因するものではないこと、むしろ日本近世期の儀礼において神霊が憑依する対象とその変化や武家霊廟にみられる人神祭祀との関連を重視して、儀礼モデルを設定し実施する際の選択の枠組みを提示しようとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

徳川儒学における儒礼受容をめぐることは、思想史研究の観点から、儒教に由来する各種の儀礼を、どのように相互に関連づけて捉えるのかという問題がある。とりわけ寛政期前後の幕府積奠は、儀礼の思想と実践の関連をめぐる、先行研究で最も実証的な検討が立ち後れていた。本研究をとおして、日本の儒礼を同時代の広い文脈で捉え、「程朱学」を標榜しつつも仏教やヒトガミ信仰の影響のもとで独自の展開を遂げた徳川儒学の祭祀の在り方の一端を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research project examines the attitudes of Rinke and the Shoheizaka scholars in the late Tokugawa Japan to the Confucian practice of sacrifice to ancestors and sacrifices to Confucius. In the Kansei-era Tokugawa government directed Rinke to return to the Neo-Confucianism in the academic learning and to revive the Engishiki in the worship of Confucius. However, there were some inapplicable aspects in the actual ritual practices to both Song China and ancient Japan. This project provides a framework of adoption and modification in Tokugawa Confucian rituals, with an emphasis on the objects of spiritual possession and the worship human beings as gods in the warriors' shrine rather than on the scholars' contemporary academic learning.

研究分野：思想史

キーワード：儒礼受容 孔子崇拝 祖先崇拝 昌平饗 神像 神位 憑依

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 1990年代に至るまで、中国思想研究においても哲学的な理気論が重視されて、社会的な礼(儀礼)の問題は軽視されてきた。日本の儒学研究においては、さらに、他の儒学文化圏と異なり儀礼(儒礼)自体が社会に広く普及していないとの理由から、思想史研究ばかりでなく、社会史研究においても、儒礼の思想と実践に焦点をあてた研究は必ずしも多くはなかった。このような儒教な背景のもと、近年、当該分野の研究者の学問的関心は、従来の研究の欠を埋めるべく儒礼研究に向かいつつある。

(2) 近世日本における儒礼受容研究は、閻斎学派を中心に近藤啓吾が先鞭をつけ、その後、比較思想史の視点から『朱子家礼』受容を扱った吾妻重二の一連の諸研究や田世民の儒礼受容研究が新たな展望を拓いてきた。もっとも、儒教儀礼には、祭天、祀孔(孔子崇拜)、崇祖(祖先崇拜)などが含まれるが、これらの研究は、主として朱熹の釈奠観や大坂町人層を基盤とする懐徳堂の実践をもとに、葬礼や父祖に対する家祭といった宗族内の家礼に関心が集中していた。

(3) 昌平黌の儒礼研究としては、釈奠に焦点を絞った須藤敏夫の包括的な検討とそれを受けたジェームズ・マクマレンや李月珊の研究がある。しかし、とくに寛政期の釈奠改革をめぐる提示された仮説は、関連史料の検討を今後の課題として残すものであり、実証的な研究としては問題があった。対象に即して検討するためには、老中として寛政期の政治改革全般に影響を与えた松平定信の著作よりも、昌平坂学問所の釈奠改革の直接的な担い手たちの関係史料を検討することが求められていた。幕府釈奠の研究についても、その後の研究進展を踏まえて、個別の論点に踏み込んで詳細に論じる余地がある。教育史研究における近世日本の釈奠と教育の実態解明にとどまらず、思想史研究として関係諸史料を再解釈する作業は、不十分であった。

(4) 徳川儒学における儒礼受容をめぐるのは、思想史研究の観点から、儒教に由来する各種の儀礼を、どのように相互に関連づけて捉えるのかという問題がある。儒礼における祭礼(父祖に対する家祭、祖先の法要)と釈奠・釈菜(孔子崇拜儀礼)の関係や異同を検討する課題ばかりでなく、近世以前からの日本の祭天や祖先崇拜の儀礼、また近世期の武家霊廟にみられる人神(ヒトガミ)祭祀との関連も、未検討のまま残されていた。儀礼や祭祀をめぐる比較思想史・宗教史などの学際的な知見から、儒礼をめぐる思想と実践についての研究が求められていた。

2. 研究の目的

(1) 本研究課題の目的は、寛政期以降の林家と昌平坂学問所関係者の儒礼をめぐる、同時代的な明代・清代学術の受容と、彼らの日常的な儒礼の実践を関係づけて検討することである。先行研究では、各地の藩学・郷学までを含む徳川日本の儒礼受容を対象にしてきた。しかし、本研究の期間内では、あえて全国規模の儒教儀礼まで対象を広げず、まずは対象に江戸の徳川幕府という限定を加え、とりわけ林家の家塾や寛政期以降の昌平坂学問所の儒者を取り上げる。海外学術蒐集の中心であった江戸儒学において、明朝学術から清朝学術へと儒者の関心が変わるなかで、彼らの儒礼の認識と実践に変化がみられたのかどうかを明らかにしようとした。

(2) 生活全般にわたる多様な儒礼のなかでも、限られた研究期間内には、各儒学文化圏内での変容を浮き彫りにする問題として、祀孔と崇祖に焦点を絞る。さらに日本の元禄期から幕末期までを対象とするが、寛政期前後を集中的に検討したい。幕府釈奠の先行研究において、儀礼の思想と実践の関連をめぐり、最も実証的な検討が立ち後れ、かつ再解釈の余地が大きい時期だからである。

3. 研究の方法

(1) 儒礼の受容とその展開という視点から、徳川儒学に対して新たな知見の提示を目指すために、本研究では、④書籍や諸史料から儒礼に関する認識を、それらの背後にある典拠を踏まえて読み取り解釈する思想史研究と、⑤実際に施行された孔子祭祀や家礼の実践を、それらの式次第などの記録から分析するという、経験レベルの実態把握を、研究方法の両軸とした。東アジアの儒教儀礼をめぐる当時の認識自体が、思想と実践を密接不可分に捉えていた以上、徳川儒学での受容と展開の解明においても、この両側面を押さえた追究方法は不可欠であると考えた。

(2) 具体的には、()幕府周辺の江戸儒学での、(a)祀孔(孔子廟での孔子崇拜儀礼)と(b)崇祖(葬礼を含む宗族内の祖先崇拜儀礼)に関する明・清朝の書籍移入とその思想の受容を追究すると同時に、()それらの文献を踏まえた上で、(a)(b)それぞれの実践における日本の文脈での独自の展開とその特徴を明らかにし、()最終的にそれらを総合して、林家・昌平黌を中心に徳川儒学の儒礼の特徴を、思想と実践の両面から提示することを予定していた。

4. 研究成果

(1) 当初の予測とその検証:

本研究を着想した契機は、2010年度から研究分担者として加わった「人類の思想的営みとしての宗教遺産の形成に関する総合研究」のプロジェクトで、日本の儒学理解に現れた宗教的側面

の検討を担当したことがあった。その際には、昌平坂学問所・聖堂での釈奠や儀礼を対象に、第一に祭礼において祖霊の憑依する対象である木主は、当該期に如何に位置づけられたのか、第二に凶像・塑像・鑄像と木主、また神位（神牌）との関係はどのように理解されたのかをめぐって、朝鮮や中国における塑像から木主への改正も視野におさめつつ、いくつかの成果発表を行った。

本研究申請時には、これらの関心を基本的に引き継ぎ、未見の関係史料を蒐集・解読して、新たな論点を含めて詳細な検討を行い、従来の試論を深めることを想定していた。しかし、研究初年度の前半が期せずして在外研究期間と重なったため、半年間英国を拠点に研究調査に従事し、関連の比較思想史・宗教史分野の蓄積の吸収に努めるなかで、本研究を国際学界で意義ある研究水準に高めるには、儀礼の思想と実践を関連づけて検討するための理論的な枠組みが圧倒的に不足していることを痛感させられた。儒礼の実践を理解し検討するためには、テキスト解釈を前提にした狭義の思想史研究だけでなく、比較宗教学、歴史文化人類学、美術史、建築史、精神医学史など、広く隣接分野の研究成果から学び、思想と実践を架橋する枠組みを模索する必要があると思われた。また儒礼を宗教儀礼の問題として検討してきた欧州の研究者たちと研究内容について対話を行うには、まず前提となる神や靈魂をめぐる諸概念について、漢語の翻訳問題にまで遡って検討する必要があった。

(2) 研究上の主な成果

孔子崇拜と祖先崇拜の儀礼を分析するに際して、特に西洋文化圏での諸研究と対話を行うためには、19世紀当時の religion 概念との関連でこれらを捉えることが課題になった。本研究では在外研究の機会を活用して、具体的には19世紀半ばまでの中国や日本の儒礼、とくに祀孔と崇祖の実践が、英国人キリスト教宣教師たちにどのように映ったかを、教会組織の当時の機関誌や刊行著作ばかりでなく彼らが筆記した諸史料のうちを探った。またこれに関連して、儒教を「宗教」と捉える20世紀後半以降の諸研究を検討し、儒礼を論ずる理論枠組みの整理を試みた。西洋に出自をもつ religion 概念とその翻訳語としての「宗教」概念の、双方のヨーロッパ中心主義的な性質と歴史的制約が指摘されて久しい。儒教が「宗教」か否かを問うことは生産的ではないが、西洋人の眼に当時 religious な事柄と映った内容が、儒教文化圏に如何なる形態で存在したかということは、歴史や思想史の分野において、いまなお有意義な問いになると考えられる。

徳川日本の広義の幕府儒者たちの祀孔をめぐる思想と実践については、まず寛政期の釈奠改革の根本史料である「釈奠私議」などをもとに再検討した。同時代的な明代・清代学術の受容と、彼らの日常的な儒礼の実践を関係づけて検討するために、そこで挙げられている国内外の史料の引用典拠にあたりつつ分析を行った。その結果、当時の幕府儒者に慣例踏襲ではない考証学的な再検討を求める志向があることが明らかとなった。

これに関連して、美術史の成果を踏まえて祭祀儀礼での障屏画選択方針とその意図を探ろうとした。寛政期の禁裏御所造営の際に、紫宸殿を飾る「賢聖障子」の図像に対して、幕府御儒者の柴野栗山は注文をつけ、古画の踏襲ではなく考証学的に検討を加える必要を提言していた。これは、同時期の学問所の聖堂での釈奠における「賢儒凶像」撤去問題とも関連していると思われる。寛政改革後の「程朱学」への固着の一方で、先例や典拠の徹底的な調査により、「古制」を正しく伝える文献や粉本の参照が求められたのは、学术界だけでなく祀孔の儀礼実践においても同様だった。

もっとも、どのような儀礼形式を本来的かつ本質的な要素として、それに合致した典拠を採用するかは、個々の思想的立場や政策的な判断によって相違が生じる。孔子崇拜儀礼の場合、古代日本の「延喜式」に載る釈奠という「古制」モデルと、中国宋代の朱熹らの祀孔儀礼のモデルを示したうえで、時勢の変化や国情の相違によってそれらのモデルがそのままに適用できない場合、「時宜」にかなった形態に改変することで本来の礼の意図を発揮させるという修正モデルが採られた場面が少なくない。

修正モデルが採用される際、明代・清代の文献に載る儀礼参照以上に具体的な形式内容の決定に作用したと推定され、本研究で注目したのは、それぞれの儀礼における神像や霊位の位置づけ方とその変遷であった。それは、祀孔と崇祖の二つの儀礼を媒介するものでもあった。すなわち、一つには、釈奠使用の神像をめぐって、神仏習合した日本仏教の強い影響を受けた日本独自の伝統とそこでの神霊の捉え方が、どのように釈奠の実践に影響しているのかを解明することであり、もう一つには、日本の崇祖の実践が、儀礼の形式面でいかに儒礼の影響を受けて変容したかである。

文献調査の過程で本研究にとって示唆的であったのは、近世期の武家霊廟にみられる人神祭祀との関連で、崇祖の墓石・石塔が、儒礼の影響もうけて、宝暦期に供養塔から霊位へと変化するという歴史文化人類学の事例調査の成果だった。それによれば、墓石の意味づけは、徳川中期の宝暦期に、死者の極楽往生（菩提）の供養塔から、死者の靈魂の依代（霊位）へと変化している。

この認識に基づき、本研究でも徳川家をはじめとして歴代の幕府儒者が関与した崇祖の関連施設での実地調査を行い、徳川後期の祭祀観は、武家社会でのこの儀礼転換の延長上に把握されるべきであるとの認識を深めた。すなわち、神霊の憑依対象に注目すると、「程朱学」を標榜しつつも、神仏習合した日本仏教や人神（ヒトガミ）信仰の影響のもとで独自の展開を遂げた徳川

後期儒学の祭祀の在りようがより積極的に説明できる。

鬼神論における「祭祀の鬼神」との関連においては、祭祀の前提である死後の霊魂とその祀り方、そしてその社会的機能を検討した。もとより、徳川日本の孔子崇拝儀礼が政治社会全体の統合に果たした意義を、過大評価すべきではない。個別地域の事例はあるにせよ、他の東アジアの儒学文化圏とは大きく異なり、社会の構成員全体には浸透しなかった。ただし、祖先崇拝がその集団に帰属する人々の社会的連帯を確認し、強化する機能を果たすように、釈奠もまた、孔子の教えを信奉する社会集団としての儒者の自覚を促し、それを相互に確認するものであったであろう。

(3) 国内外における本研究の位置づけ

国際学界で日本の釈奠研究を牽引してきたジェームズ・マクマレン氏の研究の集大成である *The Worship of Confucius in Japan* [日本における孔子崇拝] が、最終年度末の2020年2月になって刊行された。これは、東アジアの儒学文化圏での比較と日本の古代・中世から現代に至る長期的な視野にたつ孔子崇拝儀礼の研究であり、今後国内外における当該分野の重要な参照軸となることは間違いない。出版予告以来公刊が待たれていたが出版延期され、本研究期間中にこの大著を詳細に検討し、それと関連づけた研究を行えなかったことが悔やまれる。また COVID-19 の影響で最終年度末に参加予定のアジア研究学会が開催中止となり、研究成果をめぐる欧米研究者たちとの直接対話も叶わなかった。

しかしながら、寛政改革で「程朱学」を標榜した林家や学問所の儒者が、儒礼に関して先例や典拠の調査と明朝・清朝學術の受容を行いながらも、単に日本の「古礼」への回帰にとどまらず、中国の宋礼と「時宜」に適った改変という他の二つの契機との調整と統合によって、孔子の教えを信奉する集団として自己規定する祀孔儀礼を行ったこと、また日本の神仏儒が習合した崇祖儀礼の展開との関連で、祀孔儀礼の孔子像や霊位使用を捉えることは、本研究の独自の視点であり、徳川後期の儒礼受容の研究に一定の貢献ができると思われる。

(4) 今後の展望と課題

日本の釈奠研究は、前述のマクマレン氏の浩瀚な研究書出版をうけて、今後、国内外で一気に加速することが予想される。同書の内容を批判的に検討しながら、未だ十分に公刊できていない本研究の成果を順次発表していくことが求められている。またその際には、本研究に不足している、徳川後期に限定されない古代中世からの通時的研究を進めることが、国際的な研究対話と学問進展のうえで不可欠であり、今後の展望をひらくための課題となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 眞壁 仁	4. 巻 51
2. 論文標題 （書評）柳父園近『日本のプロテスタンティズムの政治思想：無教会における国家と宗教』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 内村鑑三研究	6. 最初と最後の頁 98, 110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 眞壁 仁	4. 巻 -
2. 論文標題 神の憑依するところ：昌平黌積奠改革と徳川日本の儒礼受容	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 20世紀日本における知識人と教養：丸山眞文庫デジタルアーカイブの構築と活用	6. 最初と最後の頁 99, 110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 眞壁 仁	4. 巻 20
2. 論文標題 （書評）「日本の本来性」をめぐる偽装と暴露のせめぎ合い：齋藤公太『「神国」の正統論：『神皇正統記』受容の近世・近代』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 政治思想研究	6. 最初と最後の頁 410, 411
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 眞壁 仁
2. 発表標題 江戸儒学界における清朝の領域統治をめぐる評価
3. 学会等名 島根県立大学NEARセンター拠点プロジェクト第2回国際シンポジウム「北東アジア：胎動期の諸相」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 眞壁 仁
2. 発表標題 鬼神論再考：徳川後期の儒教祭祀と依代
3. 学会等名 北大政治研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----